



札幌地区
だより

TO

と

MO

も

NI

に

第58号

発行日：2019年3月31日

●発行責任者：札幌地区長 加藤 鐵男

●発行所：カトリック札幌地区／札幌市中央区北1条東6丁目

札幌地区交流会の開催



2019年2月23日10：45～16：00

札幌教区カトリックセンター



札幌地区の司教、司祭、修道者、信徒が集い、共同体としての意識を培うことを目的として交流会を開催しました。新年度から予定されている教区の新しい司牧体制の中で、札幌地区としても信徒の主体的な宣教司牧へのかかわりがますます強く求められています。例年開催している「女性の集い」と「おやじの会」を一つに併せ、くつろいだ雰囲気の中での自由な語らいや交流を主眼として開催されました。参加者は司教、司祭11名、修道者7名、信徒115名でした。

はじめに勝谷司教から「福音と出会う場としての教会」というテーマで主に若者に対する宣教についての話題を中心に講話をいただきました。午後からは小グループに分かれて「新しい司牧体制を考えるー信徒中心の教会とはー」をテーマに話し合いました。



司教講話（要約）

青少年担当司教でもあり、日本を代表して参加したシノドスやワールドユースディ（WYD）をふくめ青少年に対する司牧についてお話します。教区の青少年活動を振り返ると、1980年代にはカト高の錬成会は毎年80～130人集まっていた。同様に全道青年の集いは100～150人集まっていた。その時でさえ、以前に比べて参加者が少なくなったと言われていました。その後、徐々に参加者は減り、2000年代に青少年の行事は軒並み中止になり、同時に小教区に若者の姿が見られなくなりました。一方、ネットワークミーティング（NWM）という全国的な青年活動が始まり、教区持ち回りで年2回開催され毎回100人以上の青年が集まっています。札幌教区でも一昨年支笏湖で開催されました。また、WYD やエクスポージャにも対応の

参加者がいます。これら青少年活動に参加する若者は、小教区から派遣されたという意識はなく、活動グループや青年サークルの団体を通して参加しているというのが実態です。

シノドスは青年への謝罪で始まりました。教会が青年たちに耳を傾けてこなかったからです。青年たちは多くの困難を抱えながらも人生の指針を求めています。それに教会が応えてこなかったから青年が教会から離れたのだと指摘されました。今回のシノドスでは、従来の「あるべき指針」を打ち出してそれに従うようにという姿勢から、謙虚に耳を傾け同伴し続けるという教会の姿勢が表明されました。これを「シノダリティー」（シノドスの意味はともに歩む）と表現し、これからの教会の姿勢となると思われます。

パナマで行われた WYD には札幌教区は東京について 2 番目に多い青年たちが参加しました。また、毎年開催しているフィリピンエクスポージャ、フィリピンボランティアにも多くの青少年が参加しています。フィリピンボランティアの参加者ほとんどがミッションスクールの生徒です。ミッションスクールとの連携が福音宣教に大きな意味をもつので、教区に学校教育諮問委員会を設置して推進していきます。

小グループ話し合い（主なもの抜粋）

1. 教会の問題、課題

- ・開かれた教会になっていない。排他的な面がある。
- ・教会運営に手一杯で、共同体の自立まで頭が回らない。
- ・教会運営が一部の信徒に偏ってていて、全員で共同体を支えるという体制がなかなか築けない。
- ・人間関係で傷ついて教会を離れてしまうことがある。

2. 信徒中心の教会について

- ・信徒中心の教会という命題に答えを出せず、指示待ち傾向が顕著となっている。
- ・司祭中心から信徒中心へ、信徒の意識改革が必要。家庭での信仰の伝承、教会での声かけなどできることから実践する。
- ・信徒自身が受身にならず、まず共同体としてできることを一人ひとりが考える必要がある。

3. 共同体づくり

- ・ミサ後に説教なり福音なりを分かち合う機会が必要なのではないか。現状ではミサが終わると矢継ぎ早に会議などが始まり、居場所がないと感じる人もいるのではないか。
- ・組織論が優先し、信徒同士の交わりが不足している。
- ・信仰の喜びを感じられない共同体に神の喜びを伝えることはできない。
- ・小教区で信仰の喜びを分かち合える場があると良い。
- ・感情的な対立はどこにでもあるもので、こちらから歩み寄ることで解決できる。

4. 信仰を伝える

- ・祈りを伝える基本は家庭にある。朝、夕など決まった時間に短い祈りでも続けることが大切だ。
- ・子どもや孫たちに秘跡の大切さや感謝の気持ちを伝えることが大切。
- ・町内会や社福との共同作業、教会施設の提供など地域社会のとのかかわりを進める。



札幌教区宣教司牧評議会の開催

2018年11月10日 11:30～16:00

札幌教区カトリックセンター



札幌教区宣教司牧評議會は、北海道全体の宣教司牧を推進するための重要事項を検討する機関です。各地区に設置している地区宣司評の上部機関であり、教区長（司教）の諮問に答えることや教区長に意見を上申することが主な役割です。構成員は地区長、地区宣司評の代表者、修道者、教区長から委嘱された評議員で、年2回教区長出席のもと会議が開かれています。

◎答申案の審議

これからの札幌教区共同体のあり方の一つとして司教から諮問を受けた「小教区特別積立金の相互利用」については小教区の考えを聞きながらフィードバックを重ねて教区宣司評において検討してきました。答申は、諮問された「小教区特別積立金の相互利用」の推進を図るという内容です。運用については、第1段階として地区レベルでの相互利用を図り、地区レベルでの対応が困難な場合に教区に図るという内容になっています。実施にあたり、運用規則を制定・告示すること。円滑な推進のため地区の検討機関は地区宣司評が担い、教区の検討機関は顧問会とともに適宜選任された信徒を加えて行うことが良いとされました。

これはあくまでも資金調達の問題であり、建築や修繕の是非を地区で検討することではありません。建築や修繕の計画承認は、今まで通り司教（教区事務局）への上申が必要になります。

◎討議～これからの札幌教区共同体のあり方について

司教教書で示されているこれからの教区のあり方について方向性を見出すために議論をしました。特徴的なものについて列記します。

○信徒中心の教会について

- ・信徒中心の教会といわれているが、その意味するところの認識が統一されていない。
- ・信徒の役割として集会祭儀など典礼のことについては熱心に議論されているが、私の意図するところは



信徒が宣教について率先して力を発揮してほしいということである。(司教)

- ・教会とは何かという共通認識が必要ではないか。

○宣教、信仰の伝達について

- ・百周年の取組のように小さなことでも教区一体となってやるのが福音宣教の原動力になる。
- ・カトリック幼稚園や学校と小教区の交流を進める。
- ・シノドスでも信仰の伝達の際は小教区だけではなく学校が大切であることを確認した。学校との対応は最重要課題である。(司教)
- ・若い人はインターネットや SNS でしか情報を入手しない。このツールを活用しなければならない。

○信徒の養成

- ・司祭、信徒の養成プログラムは頻繁に行うべきである。
- ・司教と司祭、司祭と信徒が「勉強会などを通じてコミュニケーション不足を解消する。」

○災害時の対応

- ・災害時に教会で何ができるかを話し合い、地域に発信することが必要。
- ・普段から町内会など地域とのかかわりを大切にしないと緊急時に対応できない。

祈りと償いの日

3月22日(金) 18:30
カトリック北一条教会



教皇フランシスコは全世界の司教団に向けて「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を設けるよう通達され、日本の司教団はこの日を四旬節第二金曜日とし、四旬節の間、祈りと償い、被害者の痛みを学ぶ機会を作るよう呼びかけています。札幌教区ではこの日、勝谷司教司式のもとミサが捧げられ、すべてのキリスト者とともに、傷ついた被害者の方々の悲しみと苦しみを理解し、彼等の癒しと回復のために、いつくしみ深い神に祈り、また、全世界の教会がこの困難な状況を乗り越えるために神からの恵と力づけを願いました。

札幌地区信徒養成講座



2018年8月25日10:00～16:00

カトリック北十一条教会 参加者52名

講師 吉村信夫（大阪教区六甲教会）

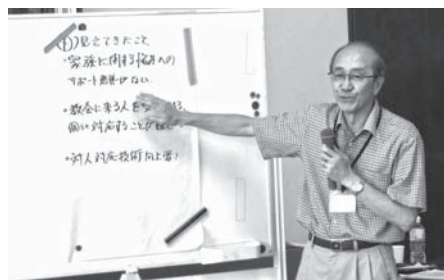
札幌地区の信徒養成講座が大阪教区の吉村さんを講師に迎え開催されました。カトリック校の六甲学院教諭である吉村さんは、「信徒の時代」のさきがけ的存在であり、長年にわたって全国各地で研修会などの講師を務めてきた方です。この講座は、大阪教区の研修会プログラムを用いて、教会とは何か、教会は何ができるのかについて考え、深めていくものです。

はじめに吉村さんはヨハネ・パウロ2世が述べた「新しい福音宣教」についてふれました。教皇は福音宣教が新しいものでなければならないとして次の三点を指摘しています。「①その**熱心**において新しい②その**方法**において新しい③その**表現**において新しい福音を宣べ伝える新たな在り方を探し求めなければなりません。」今日まで私たちがしてきたことでは足りないということです。その後、教会の本質についていくつかの文献を用いて説明しました。

午後からは小グループに分かれてのエクササイズです。「福音マーケット」というプログラムで、教会が全ての人を神の救いにあずかるためにキリストによって建てられた共同体だから、そこには全ての人々の必要を満たすための何かがある。人々がマーケット（市場）に必要なものを求めてくるように、教会をマーケットにたとえて一緒に考えていくものです。

まずそれぞれが自分、他人、社会、世界の誰かが困っていること、助けを求めていることを思いつくままにカードに書き込んでいきます。次に、教会にはこのような良いところがある、救いがあるということと同じようにカードに書き込んでいきます。書き込んだカードを大きな紙の上に並べて分類し、個人や社会が教会に何を求めているか。また、教会はそのような要請にどのように応えることができるかということをお話ししました。

困っていることや助けが必要なことは、家族や知り合い、教会の中、地域社会、学校・職場、外国人問題、環境問題、世界の紛争、内面的、外面的、さまざまな分野で多くのことが書き出されました。書き出されたことに対して教会は何ができるかについては、多くの問題について教会は答えを持っている。または、そのような教会になるべきだという方向で話しが進んだグループが多かったと思います。この講座は今後も継続する方針です。



「パナマに行ってきました」



ワールド・ユース・デイ（以下WYD）は、教皇の呼びかけによって2～3年おきに開催されていて、今回は2016年にポーランドで開催されました。今回の開催国は「パナマ」です。わたしは札幌教区の青少年担当司祭として、青年たちに同伴するべく、今回の大会に参加してきました。パナマという国は、日本と時差が13時間とほぼ地球の反対側に位置しており、赤道も近いため北半球にありながらも気温は30度以上、とにかく暑い国でした。暑かったのは、気温だけでなく日本人巡礼団を受け入れてくれた、現地の人々はとても暖かく、初めて出会った言葉も通じないわたしたちを、まるで子供の頃から知っている家族のように受け入れてくださり、青年たちも素晴らしい体験をしてきました。参加者は、3人の司教様と、同伴司祭8名を含む、総勢54名の巡礼団となりました。

WYD 通常、大きく2つのプログラムに分けられます。おおよそ2週間のプログラムが組まれる中で、前半の1週間と後半の本大会になります。その本大会前の前半のプログラムは、開催国の一つの教区が、ある一つの国から来ている巡礼団を、そっくり丸ごと受け入れてその教区での特別なプログラムを行う「教区の日々」と呼ばれるもの、そして後半の開催都市における「本大会」となります。この教区の日々においては、駐日パナマ大使の出身地でもある、「チトレ教区」で日本巡礼団は受け入れていただき、そこで用意された素晴らしいプログラムに参加しました。

特にその中でも印象深かったのは、このWYDに合わせて帰国されていたパナマ大使のお招きで、伝統的な「家づくり」を体験したことです。その家づくりは、すでに屋根と骨組みだけの家が建ててあり、その中で、足を使って泥をこねます。そしてその泥に補強繊維としての藁をどんどん加えて、さらにこねていき、最後は手でその泥を壁に塗りたくって、壁を作るというものでした。地元で英語ができる方にこの風習の意味を聞いてみると、家を建てたらその裏の敷地に「小屋」をこうしてみんなで楽しんで立てて、食事やお酒をふるまうということでした。日本でいうと「建て前」のような風習ですね。みんなで泥んこになって、言葉も通じないパナマ人と肩を組みながら、ダンスしながら泥をこねていく、そして共同作業で壁を作っていく。なんとなくその場には人種や国籍、言語を超えた「共同体」が造り上げられていくようで、まるで「こうしてキリストの教会は広がっていくのだ」と感じました。底抜けに明るいパナマ人、ラテン人らしく適当だけどあったかい。そんなあったかさが伝わる出来事でした。

前半の「教区の日々」が終わると、次はパナマシティに移動して「WYD 本大会」です。世界中から、予定では50万人を受け入れ、実際の最後のミサには70万人（バチカン放送局発表）もの人が集まったそうです。わたしたちは冬の日本から参加していますが、現地の気温はゆうに30度を越え、無理をしたり、厚さで夜眠れなかったりした青年などが、数人熱中症で気分を悪くしたこともありましたが、わたしも夜の移動中にケガをするトラブルがあって、「無事に帰ってきました」とは完全には言い切れないものの、やはり青年達においては得難い経験をしたと思います。

わたし自身もWYDはマドリード大会に続いて2回目ですが、やはり世界中から現場を埋め尽くさんと集まっている、カトリックの青年たちの熱量を感じると、その熱量に感化されて意識がとても高揚してしま

た。青年達も、こんな世界中にカトリック教会の青年がいることを目の当たりにし、まさに「蒙が開かれる」思いであったと、何人かの青年から感想を受けました。カトリックは確かに日本においては明らかなマイノリティですが、世界中にはこれほどの青年たちがいる。司教様もカテケースの中で語られていました。「青年は未来の教会を作っていくのではなく、今の教会を荷っていくのです。」というメッセージを強く出しておられました。「青年は教会にいないのではなく、教会が青年に寄り添っていなかった。もう青年について語るのはやめよう、青年と共に歩む教会であるべきだ。」そのようなメッセージは青少年担当のわたしたち司祭の胸にも響いてきました。

最後のミサ会場では、みんなが一目「パパ様」を見ようとして、沿道やパパモービル（パパ様専用のパレードカー）の通り道に群がって、動画や写真を撮ろうとスマホを高く上げていました。現代らしい風景だなと、ほほえましく見ていましたが、その反面「彼らは自分の目で見なくていいのだろうか」とも思いました。しかしやはりパパ様の威力はすごいです。それまで熱中症気味で倒れていた青年も、「パパ様が来る」と聞くと、跳ね起きてスマホを構え、良い動画や写真が取れるとそれまでの疲れや熱中症はどこに行ったのやら、元気になって大騒ぎではしゃいでいます。パパ様は偉大でした。

本大会が終わって振り返ってみると、あの熱量はいったいどこから来たのだらうと、ふと考えます。その場限りの熱狂だったのか、それとも聖霊がふいてわたしたちの心に一つの大きな共通した情熱を注ぎこんでくれたのか、帰国後にいろいろ考えてみましたがまだわかりません。しかし確かにあの場所には、聖霊が吹きわたっており、青年達だけでなく同伴している司祭や修道者の心にも、何かしらの思いを刻み込んでいきました。わたしたちは青年がそこで何を学び何を受け取ったのかを、彼らを支えながらその場限りの体験に終わらせず、次のステップへの活力として行けるようなサポートをしていければと思います。今後の青年の活動にも期待をし、希望を与える教会としてわたしたちがあることができますように。祈りのうちに皆様に感謝。

札幌教区 青少年担当司祭 佐久間力



カテケース後の札幌教区グループ



チトレでの泥壁造り

「全道青年の集いが開催されました」



11月24日から25日にかけて、札幌の月寒教会において「全道青年の集い」が行われました。全道青年の集いは、かつて全道青年会活動の年中行事として、ほぼ毎年行われていましたが、札幌教区の青年の減少や、全国的青年活動である「ネットワーク・ミーティング」に、青年が活動の現場を移してきた背景もあり、ここ数年は開催されていなかった。しかし、今年の青年会代表である、旭川大町教会所属の曾根優希さんと円山教会所属の山田康平さんの二人の熱意によって、マリアの宣教者フランシスコ修道会の Sr. 和田と Sr. 本瀬の協力も仰いで、しばらくぶりに開催される次第となった。

テーマは「～Come and See～」とし、今の青年に「教会とは」あるいは「青年とは」というテーマでの分かち合いをしてもらうことや、青年同士の交流を目的として企画された。一つの試みとして、青年が自分たちの教会との関りを見つめなおすきっかけを持つ時間とする以外に、「青年が教会に望むこと」つまり、具体的に教会や札幌教区、あるいは勝谷司教様に望むことを発表するという企画も行われた。この青年からの要望は、青少年担当司祭である佐久間神父が、責任をもって教区、そして司教様に届けるという約束をした。

青年が今何を教会に求めているのか、どのように青年と関わればいいのかは、教会にとって緊急の課題として差し迫っている問題である。そのためシノドスでも「青年」というテーマで話し合われているのも記憶に新しいことである。開催前は企画者である実行委員の二人にとっても、どのような結果となるかは全く不透明であったが、最後の発表では具体的かつユニークな青年からの希望が出され、非常に実り豊かな大会となった。

その要望の一例として「幼児洗礼であっても全く何も教会のことを知らない青年のための、一から始めるカテキズム講座をやって欲しい」というものや、ユニークなものとしては「勝谷司教様に札幌教区青年のためのテーマソングを作ってほしい」というものもあった。

この青年の集いを終えて感じることは、青年が教会に対する興味を失ったわけではなく、彼ら自身も求めているものがあるが、そこに教会がもっと興味を示し、彼らに「寄り添う」姿勢が必要なのではないかとということであった。今後、彼らの活動が活発化し、また教区の中で青年が元気に活動する姿を見かけるきっかけとなっていけるよう、多くの方の助けと祈りが必要です。よろしく願いいたします。

札幌教区 青少年担当司祭 佐久間力

